No.4

臥牛

大分県立竹田高等学校
関東同窓会
会報
第4号

発行者・会長 後藤鉄石
発行所・関東同窓会事務所
東京都中央区築地2-7-12
15山京ビル2階205号
03-3543-8747

第五回総会・懇親会

出席者　一六六人　六月二十二日

（会長あいさつを聴く会員・於プリンスホテル）

今年も雨の総会。梅雨のまっただ中の六月二十二日(土)新高輪プリンスホテルのパミール三階で、第五回総会・懇親会が開かれた。

総会

参加者　会員一六六名、来賓を加えると一七二名。会員参加者が年々増えてきたことは年一回の会合を心待ちしている会員の気持ちの現れか。それとも、組織委員会の組織化が効を奏してきたためか。

会は、新幹事長池内勇吉氏の司会で進行。来賓祝辞を入れて三十分で終了。「これが、この会の魅力の一つ。」と参加者の言。心は、懇親会。

そういえば時計は午後二時、土曜休日で遅い朝食をとった者でも隣室の御馳走の匂いが腹にしみる。拍手もそぞろに総会は閉会。

懇親会

懇親会場に入ると直ちに「水割り」のサービス。「開会のことば」や「来賓祝辞、紹介」も喉をうるおしながらの心のゆとり。この計画は粟生組織委員長の発案か。「乾杯」の音頭で、文字どおり、杯を乾している御仁を見受ける。

懇親会場で、豪華な賞品の抽選会が催される。賞品は次のとおり。

○特賞　東京大分問ペア往復券

○一等　東京大分問シングル往復券
○二等　オレンジカード
○三等　テレホンカード
○特別賞　盆栽風かぼす苗木

特賞を射止めたお方は？　その方のプライベートを尊重して特に本紙では名を秘す。

閉会四時。また来年。

会務報告

平成二年五月～三年五月

平成2年

・5月19日（土）
第4回総会、懇親会（145名出席）

・7月7日（土）
反省会・第4回総会反省と慰労。竹田市へ水害義援金送金について。

・8月21日（火）
役員会、於学士会館。組織運営について、常任幹事、幹事会の開催について。

・9月7日（金）
役員会、於学士会館。総務委員会創設、委員長・得丸大典、委員・渡辺真一。和田真琴(選任)。事務局移転の件。

・10月8日（月）
役員、各委員長会、於学士会館。常任幹事、幹事会の件。広報委員・森哲生（脱退）藤沢博吉（選任）。企画委員・小野郁彦、匂坂謙一郎（選任）、組織委員・佐藤治彦（選任）

・11月10日（土）
常任幹事、幹事、各委員長会、於中央新光監査法人。竹田市水害義援金報告。来年の懇親会は当番学年幹事　が運営する。維持会費の集金状況報告。

・12月21日（金）
役員会、於学士会館。総務委員会の事務内容について。

平成3年

・1月18日（金）
役員会、於学士会館。当番学年幹事による懇親会の運営について。総会開催準備について。

・2月14日（木）
役員会、於学士会館。よりよい広報紙「臥牛」を目指して。役員改選について。

・3月6日（水）
役員会、於学士会館。維持会員の増加と集金について。

・4月13日（土）
常任幹事、幹事、各種委員長会、於中央新光監査法人。

役員改選

相談役　高宮　昇　（再任）
会長　後藤　鉄石　（再任）
副会長　渡辺　正治　（再任）
同　伊東七五三八　（再任）
同　近藤　秋男　（再任）
同　長吉　泉　（新任）
幹事長　池内　勇吉　（新任）
副幹事長　西　誠　（新任）

総会、懇親会の開催について。

・5月16日（木）
顧問会議、於学士会館。

竹田市地域興しグループと顧問との懇談会

副会長　伊東　七五三八

六月二十一日午後五時、本郷の学士会館分館には狭い部屋に熱気が漲る。

地域興しの熱意に燃えて、働き盛りの若者九名が竹田から上京して来た。

地域興しのアイディアときっかけを求めて、関東同窓会顧問の面々と大いに話し合おうという意気込みである。

懇談会は、先ず地域興しのメンバーから竹田地域興しのビジョンと現状と取組みについて熱っぽい発言があり、これに対して顧問会議から常々故郷竹田について考えていることを述べるという形で進められた。

過疎対策

過疎対策は町の政治経済産業教育の全般にわたる問題であり、具体的には農業問題、企業誘致、観光開発、音楽の町づくり、学術研究都市構想、教育など、これらをどう捉えどう実行するかということになる。これまでの県や国から予算をもらって来て事業を進めるという行政中心のやり方では不十分で、民間の力を大いに活用するという形で推進して行きたい。最近竹田市にもゴルフ場ができることになった。豊肥線の列車が一輌で走っているのを見るといかにも淋しい。

農業問題

農業問題は深刻である。農業後継者を希望しているものは竹田市で三～四百名程度である。

企業誘致

企業誘致は竹田地域興しのためにぜひとも必要である。企業は多数の下請工場を必要とし、かつ多くの従業員を必要とする生産工場を誘致できれば、町は一気に活性化する。しかし、それには地理的条件としての環境の問題もある。

観光開発

観光の中心に岡城をすえて、石垣のラインがどこからでも見える景観づくりを考えている。竹田をもみじの里とするため、もみじの植樹事業を進めている。温泉が出ると観光も盛んになる。温度は低いが温泉が出るようになった。岡城バイパスを平成四年に着工する。

音楽の町づくり

犬のおまわりさんの作詩者は竹田出身の佐藤義美先生である。これにちなんで童謡祭を計画している。また瀧廉太郎先生記念音楽祭を全国規模のものにしたい。

学術研究都市構想

中川京大教授の発案で四月一日竹田市で国際文化講演会が開かれた。

竹田市を学園都市として大学の研究機関などを作って学生たちに親しまれる竹田の町づくりもよいのではないか。竹田と日田を結ぶ歴史街道を計画し、街道七市町村による推進協議会が発足した。竹田市は岡藩の時代から学問の盛んな町であった。伝統を生かした町として望ましいことである。

教育

竹田高校を特徴ある高校として、何か優れたものを持ってもらいたい。竹田高校によい先生が集まるよう、いろいろなところに働きかけてもらいたい。ハイレベルの学習塾を作ることも手近な問題としてひとつの方法ではないか。

結び

これらの問題をすべて実行しようとするよりも何か一つにしぼって重点的に手をつけていき、あきらめないで希望をもち続けて魅力ある町づくりをしてもらいたい。

今回の懇談会は急に計画したことと時間不足もあって、総論的、概括的な内容の話し合いに終ったが、重要かつ困難な問題なので、次の機会には論点をしぼって、十分に準備をしたうえで具体的な問題について話し合うことにより、充実した結果が得られると思う。

（二十年卒）

出席者（敬称略）

矢嶋三義、加藤郷一、工藤幸男、高宮昇、後藤鉄石、渡辺正治、伊東七五三八、池内勇吉、長吉泉、里見菊雄、西誠、服部恭一、内川紀昭、菅謹一郎、姫野勝俊、衛藤慎二、高野将、板井良助、後藤真志、家原清、井上隆。

会計報告

収支計算書
（平成2年～平成3年3月31日）

Ⅰ．収　入	4,717,402円
1．普通会費	20,300円
2．維持会費	1,381,000円
3．当日会費	807,000円
4．助成金及び寄付金	140,000円
5．受取利息	20,000円
6．幹事会会費	48,000円
7．雑収入	150,460円
8．前期繰越金	2,149,752円
Ⅱ．支　出	2,853,091円
1．第4回総会関係費	1,041,851円
2．幹事会・委員会関係費	270,276円
3．通信費	589,054円
4．消耗費	208,947円
5．印刷費	489,838円
6．交通費	5,760円
7．交際費	30,140円
8．雑費	63,338円
9．広報委員会	153,887円
Ⅲ．次期繰越金	1,864,311円

Ⅳ．繰越金の内訳（平成3年3月31日現在）

三菱銀行新川支店　普通預金口座	817,159円
〃　定期預金口座	1,000,000円
現金	47,152円
合計	1,864,311円

水害義援金

Ⅰ．収入		3,722,000円
Ⅱ．支出		3,722,000円
内訳	竹田市	3,222,000円
	竹田高校	500,000円
Ⅲ．差引		0円

上記の通り報告します。

平成3年4月30日

幹事長　池内　勇吉

監査報告

監査の結果、この収支計算書は正確であることを認めます。

平成3年5月1日

会計監査　吉田　忠
同　留高　照幸

各種委員会より（参考）

平成2年度収支計算書

1．収入	2,567,000円
支出	2,853,000円
差引	△　286,000円

詳細は総会のしおりに掲載したとおり。

2．維持会員の移動

平成2年6月	140人
平成3年6月	260人（＋120人）

3．広報紙の実費（1部代金）

平成元年　90円，　2年　115円

先輩を訪ねて

よき師を得て人は育つ

お客様・加藤郷一氏

・とき　平成三年六月二十四日
・ところ　伊東法律事務所
・聞き手　足立五郎

加藤郷一氏　略歴

大正元年生。大正十四年竹田中学校入学。昭和四年旧制福岡高校入学。一一年東大法学部卒業。一九年三井鉱山より三井造船へ転社。岡山県玉野造船所赴任。四十一年取締役就任。玉野造船所長。四十四年千葉造船所長。四十七年本社常務取締役。五十三年退社。現在三井造船社友。

足立　本日はお疲れのところお越しくださいましてありがとうございます。お生まれは東京で、幼い頃中国の漢口に行かれたそうですが。

加藤　母かたの祖父が漢口の「同仁病院」の院長をしていましたので、大学の医学部を出た父・元生（竹田中学校第二回卒業）は祖父を助けるためその病院の医師になったのです。そこで私たちは中国の革命家「孫文」に出会いました。孫文は同仁病院で診療を受けていたので、祖父と懇意になっていました。ある日孫文が「明日の晩、花火があるかも知れません。」と何気ないような調子で母に話した由。母は何んのことかと思っていると、揚子江を隔てた対岸の漢陽で激しい光りが見えました。これが孫文の革命の端緒です。この時孫文は負傷して同仁病院に担ぎ込まれたのです。入院中に撮った包帯だらけの写真が今もわが家に残っています。

足立　血腥い話ですね。しかし、その写真は家宝ですよ。で、いつ帰国なさったのですか。そして、中学入学は？

加藤　父は大正八年に帰国しましたが、私は大正三年三歳の時です。竹田中学には大正十四年に入学し、四年修了で福岡高校（旧制）に進みました。

足立　中学校時代の先生や校風などについてお伺いいたします。もう軍国主義の兆しはございましたか。

加藤　そうですね。軍事教練はありましたが軍国主義的な風潮はそれほどではなかったですね。現役の将校が各校に配属されたのは、私が四年生の時でした。竹田の町はご存知のようにすぐれた芸術家、文人墨客を輩出した土地ですからね。生活は豊かではありませんが、自由で明るく楽しい中学時代でした。あなたが知っている先生としては、田北、小野両先生でしょうか。四年生の時に和歌山中学校の教頭から校長として赴任された府瀬川熊司先生は、すばらしい教育者でした。ご専門は英語で、東京高等師範学校英文科のご卒業です。学校時代はかの有名な岡倉教授の高弟であられたと伺っております。私たちは、府瀬川先生によって英語の力、特に上級学校受験のための力をつけていただいたと今でも感謝しております。

足立　お話を高校時代に進めさせていただきます。当時の学生生活や社会情勢の一端をご紹介くださいませんか。

加藤　当時の日本は、今と比べられないほど貧乏でした。特に東北地方が貧しくて農漁村の娘の身売りが続出、悲しい話が新聞を賑わしていました。したがって学生たちも、共産主義的な考えをもち、マルクスの本を多少なりとも読まなかった者は少なかったでしょう。学生はよく特高警察に尾行されたりしたものです。世に言う赤狩りです。一般国民は流行歌（たとえば「酒は涙か溜息か」を口ずさむことで、心のうさを晴らしていたのでしょう。また学生の中には麻雀に溺れる者が多く麻雀落第生ということばが新聞ダネになりました。

足立　加藤家は代々医者の家系と伺っていますが、法学部に進まれた特別な理由がございましたら。

加藤　特にあったわけではありません。たしかに医者の家系です。父は、四代目でした。その父は、「開業医は体が余程強健でないともたない。」と言っていました。叔父・徳善（竹田中学校第十回卒業）が三井物産に勤めておりましたので、父も文科系がよいと賛成してくれました。

実は、私は高校で一年間休学しました。いえ病気のためではないんです。至極健康でしたが「長い人生を無事に過ごすには、若い時に充分基礎体力をつけておくべきだ。」との父の平素の主張に従ったわけです。父は四年修了で上級学校に進むことには、余り賛成ではなかったのです。私は一年間竹田で釣りなどしてゆっくり遊びました。今にして思えばありがたい父の配慮でした。

足立　大学卒業後のお話をお伺いいたしますが、卒業と同時に三井造船に就職なさったのですね。

加藤　いや、三井鉱山です。昭和八年四月に大学に進んだのですが、思いがけなくその六月に父が急死、弟妹も多かったので私はなるべく高給を希望し、三井鉱山系の満州の石炭液化工場に赴任しました。給料は二倍になり、半分位は家に送金できましたよ。しかし、妻子の健康を考えると、満州の冬の寒さは好ましくないと考え、十九年に同じ三井系の岡山の三井造船に転社しました。当時の造船所の仕事の三分の二位は海軍のものでした。今考えると不思議なことにドックが爆撃されたのは、ただの一回だけでした。

足立　米軍は戦後の造船業のために意図的に工場施設を残したのでしょうか。

加藤　そうではないと思います。米軍機としても遠くから爆弾を運んでくるのですから、直接の兵器工場を狙った筈です。完成した船は、潜水艦で沈める方が得策と考えたのでしょう。

足立　造船界は戦後も一層忙しかったと思いますが。

加藤　そのとおりです。戦争で勝った国も負けた国も戦後の産業復興となると、まっ先に船が必要です。したがって内外からの造船注文が殺到し、会社は多忙を極めました。日本の造船所は、昔から海軍と共に造船技術の向上に全力を傾けてきました。そのために世界的に見ても非常に高い技術を備えていました。と同時に日本人の技術者のレベルも高かったと思います。このことは今も同じです。それを見て戦後海軍の仕事がなくなり、手のすいている日本に造船の注文が世界各国から殺到したのです。製品の質の優秀さと納期の確実さが高く評価されたわけです。元来日本人の作業水準は、どの面でも質が高いですよ。

足立　最後に竹田高校や竹田市にどのようなことを期待なさいますか。

加藤　それはなんと言っても教育です。竹田の発展を考えるには、竹田以外の土地や都市の実情を知った上で、「しからば竹田はどの方向に進めばよいか。」を考えるべきでしょう。高校生は、とにかく勉強して上級学校に進むことです。そのためには、教育に一層力を入れることでしょう。

足立　長時間、貴重なお話をありがとうございました。（文責　足立）

ふるさと便り

母校のあれこれ

竹高同窓会事務局長　波多野　英次

事務局長
波多野英次

たいへん意味のある思春期を竹田で送ることになった。当時教育の新制度による混乱も、竹田では独自の教育理念に置き換えながら、小中高校をスムーズに移行してくださった校長先生方がおられた。これは竹田地方に根づいた藩制の伝統を受け継いだ文化的水準の高さが受け入れる側にもあったればこそと思う。そのころの竹田周辺地域は、藩制以後からの伝統的文化圏が当時まだ崩壊せず竹田地方文化の中心は竹田町にあり、近在の広範囲の人々が集まり、人々の層も厚くしっかりと統合されていた。

以上は二十八年卒の後藤紀子さんの著書「花筏」の中より、竹田へ疎開された後のことを述懐された部分から、抜粋させて頂いたものです。各人、各時代によって故郷や母校に対する感慨は多様でありましょう。戦後のこの時期も、いろんな面で母校が異色のあるピークを形成した時代であったと思います。

先日、田北会長、山南副会長他関係者の話し合いの中で、全日空社長の近藤秋男氏や新日鉄重役の阿南惟正氏等どなたかに母校で講演をして頂いてはとの話がありました。しかし、この方々はいつ電話をしても外国に行ってるとか何とかで多忙だから難しいのではとの色々な憶測もしました。その折、二十六年卒の竹田駅前の森機械店社長と高校教師の長嶺先生の両人が来校され、今度卒後四十周年の同級会で阿南惟正氏が帰郷するので、この機会に在校生に講演をして頂いてはとの、渡りに船の話がありました。この年代の同窓生も青春時代を戦中戦後の竹田で過ごされた方々でありますだけに、事務局としても是非実現させたいものと頑張っております。

次に、先般の同窓会役員会、その後日の支部長会の席上、大野寿一校長が学校の現況を話されました。それを参考に以下報告致します。

先ず母校の施設設備ですが、県下の高校でも有数のものとなって参りました。創立九十周年で建設いただいた修道会館は第二体育館として、その二階は器楽部の練習場として体育文化両面で利用されています。また各種の宿泊研修をするセミナーハウスや、剣道場と弓道場の新築、グランドの整備、テニスコートの新設、体育館の屋根の改修と地下の卓球場の全面改修も終りました。今後は自転車単車置場の全面改修、教室棟の整備、家庭科棟の設備の充実、柔道場の屋根の改修等が計画されています。

次に、進路についてですが、今春の卒業生の頑張りは例年とほとんど変らない成果を上げています。

進学では国公立で九大、千葉大、広島大、都留文大、大分医大、大分大等67名、私立では早大、国際基督教大、東京理大、明大、日大、立命館大、西南大、福大等一〇〇名、短大、看護専修学校等一二四名、就職では、企業へ16名、公務員合格12名、等延べ二九一名が合格しております。

また、部活動の面では、弓道部が九州大会で男子3位、女子5位、全国大会でベスト8に入り、国体強化校の指定を受けました。山岳部は国体予選で男女とも優勝し、今年8月の熊本ミニ国体への出場が決まっています。剣道部、野球部、その他の部も好成績をあげております。一方文化部の活躍もめざましく特に民俗部、美術部、書道部等がいろんな賞に輝いています。

先の高校県体では、陸上部で、山口牧（3年）が女子四〇〇mで、山下るみ子（2年）が女子走高跳で北九州大会への出場権を得ました。弓道部は、男子がインターハイへ、女子は九州大会へ出場します。残りのスペースが無くなりました。では「ヨッチョクレ」を聞きながらお別れしましょう。皆様の御健勝をお祈りします。

城はナー城は世界に春高楼の、歌で聞こえた岡城址ソレ、一遍来ちょくれ寄っちょくれ、豊後竹田は城のまち。

（二十八年卒）

クラス会の動き

関東竹高二五会だより

鐘ケ江　碩則

二五会（ニイゴウカイ）は、昭和二十五年の卒業生による関東同期の会です。同期生も今年は、全員六十歳になり、昨年（十一月三日文化の日）竹田で一年早く祝った還暦の報告を兼ねて、新年会を二月二十二日三和銀行四ツ谷クラブ（本田仁夫君世話）で実施しました。関東在住三十三名中二十七名の出席、その他大分からは、吉良文至君（現在、森崎建設工業取締役）及び卒業当時共学ではありませんでしたが、女性代表として習志野在住の平原秀子（旧姓清田）さんも出席され、総勢二十九名約二時間のたのしい一時でした。

会では、生憎還暦祝いに出席できなかった同期生にチャンチャンコを贈呈、眼前に見た竹田の水害の状況、郷里で久し振りに会った友の近況及び昭和二十五年卒業生の「記念文集」作成のため、全員に原稿依頼等々、和気藹々のうちに次会を約して無事終了いたしました。

今回、二五会としては、初めての集まりですので会の名称を「関東竹高二五会」と命名し、

一、会長　粟生誠之助（竹田）
一、会計幹事　徳丸　達男（三重）
一、幹事　河野　尚之（豊岡）
　　佐藤　邦夫（三重）
　　本田　仁夫（松本）
　　羽田野船太（朝地）
　　田北　忠（竹田）
　　鐘ケ江碩則（竹田）

以上を選出いたしました。

なお出席者は次のとおり。

粟生誠之助、安東和彦、上尾憲良、伊藤賢二、大澤昭夫、川口誠一、河野尚之、後藤裕、佐藤邦夫、沢村拓、田北忠、大保正義、田部実、徳丸達男、野本吉之助、羽田野船太、藤沢博吉、堀旦、本多仁夫、牧野克巳、松岡時重、森昭彦、森義幸、山辺博治、和田公昭、和田二士、鐘ケ江碩則。

（二十五年卒）

クラス会の動き

来年は35周年記念クラス会を

藤本　文生

一年に一度関東地区の三二会は開催されています。今年も六月七日品川のホテルパシフィックで二十七名の出席で盛大に行われました。

三二会は関東地区だけでなく、地元竹田にもあります。竹田でも年に一度九州地区で開催されます。昨年は水害の関係で中止し、今年は小倉で全国の三二年組を集めて行われますので関東三二会も何名か出席する予定です。

来年で卒業三十五年になりますが、三十周年は竹田で全国から沢山の人が集まり母校で開会式を行い、夜はホテル岩城屋でパーティーを、夜の更けるまで三十年の足どりを語り合いました。翌日は岡城に幻の岡城址を見学に参りました。

（急造のすてきな天守閣をバックにして）

岡城に城を復元するか否か議論があることかと存じますが私個人としては、あの時の感慨からすれば復元して欲しいと思います。

私も三二会の幹事を二十年以上やっており、そろそろ次の人をと思っていますが、なかなかそうもいかず、およばずながら今しばらくお手伝いする予定です。現在東京近郊に五十名の同級生がいますが、なかなか全員の集合とは参らず、多い時で三十数名の顔がみられます。卒業以来初めての出席者もいます。自己紹介のある前にすみの方で、「おいあいつは誰かな」とひそひそ話しもあります。卒業して三十数年もたちますと紹介されて「お前か」と声がとびかう事も度々あります。

三二会で年に一度逢う以外に田北先生、首藤先生がたまに上京されますが、その時は有志でミニ三二会を開催します。

たまに辻君から中学の先生が上京するから集めてくれと依頼が有りますが、私は朝地ですからとやんわりお断りすることがあります。三二会はこんな具合に同級生の上京などにもあわせて、開いています。

「よだきい」「せちい」などなど沢山の方言の中で三二会はいつも時間の過ぎるのを忘れています。

来年は卒業三十五年、何か記念になる会をと想いをはせつつ！

（三十二年卒）

35年が一気にタイムスリップ

市川　奈美子（旧姓古庄）

念願の三五会三十周年クラス会が、昨年九月の連休にふる里竹田で行われました。久しぶりに竹田は、街並や道路がすっかり立派に便利になっていて驚かされました。それでも竹田高校へと向かう私の気持ちは、もうすっかり竹高生の気分、校庭では、すでに何人かの人達が出迎えてくれていて近づいてみると、ああ、なつかしい面々、お互いに思い出すのにそう時間はかかりませんでした。お互いに手をとり合ったり思わず涙ぐんだり、それぞれの三十年が一気にタイムスリップした瞬間でもありました。

三年間お世話になりました諸先生方の昔のエピソードや御苦労話に笑ったり涙ぐんだりであっと云う間の数時間でした。

それから全員で岡城にのぼり、なつかしいふる里を一望し大声で「校歌」や「荒城の月」を合唱しました。七月の水害がどんなにひどいものであったかは想像以上のもので、鉄道のまくら木は浮き上ったまま、そこいら中に石ころや丸太が散乱した有様に復興にはかなりの月日がかかるものと思われます。

夕方よりホテル岩城屋にて三十周年記念パーティーが行われました。参加者百余名と云う大盛況振りで、あちこちのテーブルではもうすっかり高校時代に戻った気分で「……ちゃん……くん」の呼び合い、時のたつのを忘れてしまう程「時間よ止まれ！」思わず云いたい程、最後に全員で輪になって体育祭の時にいつもうたった「戦い勝てり……」や竹田のうたや、校歌などを歌い、まずは一日目を閉幕二次会三次会と別れを惜しんだ方々もいました。

関東関西東北北陸と、忙しい中を帰って来てくれた友、私共の帰りを待って色々と準備をして下さったふる里の友に心から御礼を申し上げます。

次の日は久住高原から魚住迄のコースを何台かの車に分乗して回りました。いつ来てみても変わらない悠大な久住は素晴らしい……忘れかけているものが見つかりそうなそんな心になったのは私だけではないでしょう。牧場でのアイスクリームや牛乳の美味しかった事！忙しい時間をさいて御一緒して下さった皆様に感謝々々忘れられない感動の一日でした。

東京からわざわざかけつけてくれた堀昭雄さんあんなにお元気でしたのに…今にも笑顔でひょっこり…そんな気がするのに…この五月十八日急逝されました。ご冥福を心から御祈りいたします。

合掌！

（三十五年卒）

（総勢95人の出席者）

会員の点描

親の心　子知るや

八木　洋子（旧姓河野）

私は昭和四十四年生まれ、二十二歳大学生。出産時四キロ五十三センチと大きく母を苦しめたとか。現在は六十キロ百七十センチ、外見は立派な大人ですが、まだまだ未熟者です。人間としての基礎教育が終り、これから応用編に入るところです。

これ迄の間、母は母なりに充分考えて育ててくれたと思います。幼い頃は、躾に厳しく、友人宅で遊んで帰宅し「玩具は片づけてきたの？」と注意され、失礼があったと、一人で謝りに行った事もありました。

幼稚園は近所の人の通っていない所へ入園しましたが、何処へ行っても、友人がすぐ出来るように、友人は大切な財産だからとの考えからです。

その時期に忘れ物をして、母にひどく叱られたのですが、何故あんなに叱られたのか？本当の意味がわかってなかったのです。先日母とその時の話をし、学生時代忘れ物をせずに通せた訳をあらためて納得しました。そして、叱り方のむずかしさ、子供の気持について考えさせられたのです。

高校迄は、勉強・躾に気を配ってくれた母でしたが、高校入学後「これで貴方に対する教育は一応終りです。これからは、進みたい道をめざして頑張りなさい」と言われました。

私としては、うれしい反面、責任を感じ気が重かったのですが、自分でその後の道を決め努力しました。

母はよく大分の祖母の話をしてくれます。辛い事があっても、明るい方向に考えて生きてゆくこと、又、より良く生きる為の、人間関係等、母の子育ては、祖母のそれに大きく影響されています。

「自分の人生を大切に、毎日を精いっぱい生きて、悔いのない人生をおくってほしい！と願っている」という母は子供が傷つき、落ちこんだ時に、そっとささえ、勇気づけてあげられれば、幸せだと考えているのです。これから社会に出て、いろんな事に遭遇すると思いますが、母の教えを参考に、自分なりの答えを出して行くつもりです。…息子の目に映った私の子育て…

（三十八年卒）

竹田の名水で水割

ニューロバン

西武新宿駅より歌舞伎町のど真中を通り抜け、およそ五分ほどすると、バッティングセンターの隣の小さなビルの四階、ニューロバンに到着する。

中に入ると未だ早い時刻にも拘らず若いサラリーマン風のグループが、三ツあるボックス席を占領し、すでにカラオケに盛り上っていた。カウンターではお馴染みさんらしい中年の紳士が水割グラスを片手にカウンターの中の女性との話が弾んでいるようだ。突然カラオケの音が止むと、ちょっぴり竹田なまりの残る話し声が聞こえてきた。

「しばらく来んかったけど、どうしちょったん。」「いゃあ、ここんとこ仕事が忙しいきなぁ。」この声の主こそ、当店のマダム土居三代子さん（旧姓内川、昭和三十八年卒）である。この店をオープンしてすでに十年、昔テニスで鍛えた根性で頑張っております。

○店名の由来―昔通った喫茶店の名前をそのまま頂戴した。
○ボトルの値段―約七〇〇〇円／スーパーニッカ
○一人当たりの値段―八〇〇〇円程度
○営業時間―午後七時～十二時まで
○土曜日も営業しています。
住所・新宿区歌舞伎町二―二十一―六ハタノビル4F
電話・〇三（三二〇五）二二六九

詩とわたし

村尾　イミ子（旧姓本郷）

「紫明」という文芸雑誌に高校時代参加しておりました。「先端」を創刊したのもその頃で、あるいはそのへんが今の私の原点になるのかもしれません。竹田は詩情ゆたかな街であったと思います。そしてそのような芽を、竹田高校は大切に育ててくれたのでしょう。その後、文芸とは無関係の方に進み、結婚、子育てをへて、昭和五十四年頃「生活と詩をつなぐ野火の会」を主催されておりました高田敏子先生を知り御指導を仰ぐようになりました。それで昭和五十九年に第一詩集「愛」、を六十二年に第二詩集「プランコ」を出版することが出来ました。平成元年に高田先生は亡くなられましたが、野火時代を通じての現代詩の先生方のご指導や、多くの詩友たちと今も、いくつかの同人誌に参加しております。

みち

しろいはな　きいろいはな
さきこぼれ
きぎ　もえる　きせつに
ひとり　やんで

びょういんに　むかう　みち
さくらのはな　しきりに　ちって
ああ　わたしの　ゆくて
はなびらで　みえない

詩集「プランコ」より

さとうよしみさんのこと

（佐藤義美　一九〇五～一九六八）昭和期を代表する童謡詩人、童話作家の一人です。竹田出身、童謡「いぬのおまわりさん」でよく知られています。竹田市に詩碑を建てようというお話があると聞いています。（三十二年卒）

東鈴車体株式会社
代表取締役 社長　池内勇吉
〒179東京都練馬区高松5丁目10番6号
TEL 03-3904-3907(代)
FAX 03-3996-9202
旧制竹田中学校23年卒

会員の点描

父と表現

内山　倶子（旧姓北村）

お盆で町がざわめいていた。

「盆じゃ提灯じゃ
　あすの晩は、祝言じゃ」

遠くからも近くからも、子どもの歌声が流れている中を袴をはいた父に手を引かれ、赤い絵柄の子ども提灯を下げて、寺町の光西寺で催されていた活動写真を見に行った。

これが私の記憶としては、最初のものである。境内に白い幕が張られてそれに画面が映し出される簡単なものであったが大ぜいの見物人がいた。「もう帰ろう」このひとことで私は引張られるように家に帰った。父の言葉は、表現が少く、語気も強いので恐い父と思っていた。やさしい言葉遣いの出来ない父であったのである。

昭和二十年、私の夫が出征したので越後の夫の実家に疎開することになった。生後一年の長女を連れていく私を気遣って、父が同道してくれることになった。

警戒警報の鳴りひびく、うす暗い上野駅を重い荷物は父に持ってもらい私は背中の赤ん坊にも防空頭巾を被せ夜行列車で出発した。

翌朝、信越線潟町駅に着いた時は、これが同じ日本の国かとその静寂さに驚いた。遅い春を迎えた雪国の春は、木も草も一せいに春の息吹を張らせあたり一面が新鮮に思えた。

早春の美しい空、雪を頂いた雄大で気品の高い妙高山、いかにも清々しい越後路らしい景色にしばらく足を止めていた父は、「ここは正しく桃源郷、子どもを育てるには理想的な土地だ」と、いったが、これはこれから大ぜいの家族と暮らす私に良い暗示を与えたのだと気がついたのは、後になってからである。

幸い、終戦となり、夫も復員して又東京の生活が始まった。月日の流れは早いもので越後へ疎開した長女も結婚することになった。八十四歳の父が長女に直接会って祝いを言いたいと竹田から上京してくれた。桜吹雪の舞う式場の庭で初孫の花嫁姿に目を細めている父のやさしい顔は、昔の顔とは違っていた。

八十二歳で完成した千五百ページの「中川史料集」を前にして父は、夫と私に、「私ほど数多くお城山に登った人は今のところいないでしょう。郷土史は、机の上で本を読むこと以上に、足を使い現地へ行って人にも会い自分の体で確かめることがより大切です。幸い私は、足が丈夫ですが、これは大分師範時代、馬車に乗る金がなくて大分から岡本村（父の生家）まで週末には歩いて帰ったのが良かったのです」　この頃になると父の表現にも厚みが出てやさしくなっていた。夫と私は、うなずきながらこの話を聞いていた。

父の訃報に、熊本空港へ急ぐ機上から、父の大好きな山「祖母山」「傾山」が見えた時は、目頭がにじんできた。

葬儀の日は、奇しくも岡城で「桜まつりが華やかに行われていた。父の最後の日にふさわしいような気がして竹田市に陰ながらお礼をいった。

父の遺した、奥の谷の「奥渓文庫」の壁に、江戸時代の儒者佐藤一斎の色紙が掛けてあった。

少而学則壮為有
壮而学則老不衰
老而学則死不朽

これは、父の無言の表現であったような気がするのである。

（九年卒）

稲葉会の思い出

倉田　敏子（旧姓藤野）

故里竹田の思い出をとの御依頼をお受けしたものの、思い出す事は子供の頃の祭り遊びととりとめのないほど楽しい思い出があり、次から次と浮かんで参りますが、さて何をと考えると一寸まとまりがつかず困りましたので、稲葉会の私の思い出を書かして頂きます。

私共の年代は、戦争を境目に子供と大人の時代が分けられる様な過ごし方をして来た様な思いがいたします。

終戦後の二十一年に私は上京してから、子育てに追われ、ほっと一息つけた時に現会長の石原様にお誘いを頂き、初めて稲葉会に出席致しました。忘れもしません、会場は有楽町のニュートーキョーで、エレベーターの前でバッタリ同級生の方に二十幾年ぶりかで逢った時の胸のときめき、本当に今でもはっきり思い出されます。会場に入ってなつかしい恩師、先輩の方々の顔々。出席するまでの迷いも消えて、本当に出席してよかったと石原様に感謝致しました。それがきっかけで、毎年一年一度の逢う瀬を楽しみに、会場も当番年度の方々のお骨折りであちこちと巡り大変楽しんでおります。

最近は女学校卒業の方々もだんだんお年を召され、楽しみにしておられるのに出席出来ない等の理由で、欠席なさる方が一年一年増え寂しくなっております。せっかく亡き三宮先輩が一生懸命築き上げて下さった稲葉会です。何とかして高校卒の方々にも御賛同を頂いてせっかくここまで交友を温めて参りました稲葉会を、故里竹田高校出身の方の親睦の場として、お若い方々にどんどん参加して頂き、何時何時迄も火を消す事なく続けて、一年一度の逢う瀬を楽しみにして行きたいと願っております。

（十三年卒）

ANA 全日空
ひとは、どこまで自由に、大空を愉しめるだろう。

BOEING 747-400
TECHNO-JUMBO

各種委員会より

「維持会員五百人」を目指して

総務委員長　得丸　大典

○　維持会費の納入につきましては、平素のご協力を感謝いたします。今年度は、一二〇人増の合計二六〇人となりました。平成二年度の会の財政状況は、別記のように赤字決算となっています。六月二十二日、新高輪プリンスホテルで盛大に第五回総会及び懇親会が行なえたのも、維持会費の積立によるものです。当日の会費収入で、会場の使用料等の支払いが無事終わったということだけです。抽選の賞品、お土産代等の費用は、維持会費から支出されています。

○　平成二年度の収支決算書の赤字二八六、〇〇〇円は、前回の広報紙でお知らせいたしましたように、義援金を会員から送付頂きましたものの全額を竹田市他に送金しました発送諸費用を、維持会費で負担したからです。維持会費の本来の目的からして、会費がこのように支出されることは、会費の目的にそっていると思います。しかし、同窓会の今後の発展のためには、現在の維持会費収入では維持するだけがやっとです。

○　そこで、同窓会の発展を図るためには、五百人の維持会員が必要です。現在の維持会員が、各々一人だけ増加して頂ければ達成できると思います。未加入の会員はぜ一人でも入会されることを切にお願いいたします。

（二十年卒）

当番幹事の皆さんご苦労さま

企画委員長　佐藤　映之

第五回目の記念すべき節目の同窓会は雨天にもかかわらず、一七〇有余名のご参加があり大盛会でした。これもひとえに会員の皆様の限りない母校愛と強い友情の絆の証であることは申すに及びません。又限られたわずか二時間余りの懇親会の運営を魅力ある内容を企画、演出していただいた当番幹事の皆様のご苦労の結果であることも特記したいと思います。

過去四回の同窓会の状況を踏まえ、今回から懇親会の部を当番幹事制（卒業年次単位）で行うことになりました。初回の今年は、昭和二十三年卒（旧制中学最後の卒業）、二十四年卒（新制高校第一期）及び二十五年卒の皆さんの合同で取り仕切っていただきました。

おかげ様で会場は終始なごやかな雰囲気を醸し、時の経過を忘れるほど内容のあるものでした。ご参加の皆さまには、竹田銘菓「荒城の月」のお土産、即売品は奥豊後の名産品を揃え、そしてメインイベントは福引抽せん会。これも竹田のローカル色をふんだんに盛り込んだ中味（東京大分間の航空券、竹田産のテレフォンカード各種、カボスの苗木etc）ばかりでした。

今回の担当幹事の皆さんは、戦中は学徒動員を経験され、戦後は学制改革（旧制中学→新制高校）で、名実ともに混乱期に卒業なさった方々だけに上下左右の結束力の強さとチームワークの良さを垣間見ることができました。本当にご苦労さまでした。

次回は、二十六年卒（第三期）と、三十六年卒（第十三期）が合同で当番幹事をお願いします。

（二十八年卒）

盛りあがった総会

総会運営実行委員長　粟生　利信

本回の運営実行委員を代表しましてご挨拶を申し上げます。皆さんには雨天にもかかわらず今回関東同窓会第五回総会、懇親会にご出席をいただきまして、誠にありがたく厚くお礼申し上げます。これから懇親会を開催させていただきますが、今回は幹事会において、当番幹事は昭和二十三年、二十四年、二十五年卒業者の連合で、この会を運営することになりました。

その運営委員は、飯倉次男（敬称略卒業年アイウエオ順）池内勇吉、甲斐正和、真田次磨、栗生誠之助、鐘ヶ江碩則、河野尚之、徳丸達男、そして小生の九名で、この方々と数回会合を重ねまして今回の開催となりました。なお、会場につきましては、佐藤企画委員長、匂坂謙一郎殿の絶大なる協力により、かくも立派な会場で開催することなりましたことをお知らせします。

それから、懇親会中に抽選会を行いますが、受付で会費の領収書と一緒に抽選券を差し上げてございます。来年の第六回の総会、懇親会の当番幹事は、昭和二十六年と三十六年卒業者にお願いすることになっております。よろしくお願い申し上げます。

以上簡単ではございますが、ご挨拶といたします。

（二十三年卒）

あとがき

☆たいへん遅くなりましたが、臥牛四号をお届けいたします。臥牛は今回より体裁・内容を一新いたしました。お気付きのように本文の活字を小さくし、一頁を五段組みにしました。限られた紙面を有効に活用し、少しでも多くの方々の原稿を掲載したいと考えました。

☆次に新しく「先輩を訪ねて」の頁を設けました。然し、委員の力量不足のため、先輩の意を充分に紙面に生かすことができませんでした。恥入るばかりです。皆さんの厳しいご意見をお待ちいたします。また、今回より女性会員に多く登場していただくことにいたしました。ご協力を感謝いたします。

☆広報委員が二名増員されました。八木洋子氏と古庄史郎氏のともに三十八年卒業です。二人の活躍を期待しております。

（足立）